

# レジリエンスが大学生の自己困難認知に及ぼす影響

○中山隼登<sup>1</sup> 宮里翔大<sup>2</sup> 山村 豊<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>帝京大学 <sup>2</sup>桜美林大学)

キーワード：レジリエンス、自己困難認知、発達障害

## 【問題】

レジリエンスとは、American Psychological Association (2020)によると「逆境、心的外傷、悲劇、脅威、あるいは家族や人間関係の諸問題、深刻な健康問題、職場や経済的なストレス要因から派生した重大なストレスに直面したときに、それにうまく適応する過程」としており、ネガティブなことから回復、適応する特性である。そのネガティブな出来事として、大学生の学生生活における困難が挙げられる。大学等では、学生に対して発達障害への支援が行われているが、発達障害の自覚はなくとも、何らかの修学に関する困難さや身体的・精神的な辛さを感じている学生も多いと指摘されている(佐藤・相澤・郷間, 2012)。

## 【目的】

本研究では、レジリエンスに着目し、大学生におけるレジリエンス要因が、学生生活の中で大学生が認知した困難にどのような影響を及ぼすかを検討する。

## 【方法】

調査対象者 関東圏内の大学生 329名(男性183名、女性145名、その他1名)、平均年齢19.73歳±1.24であった。

実施時期・場所 2022年4月から6月にかけて関東圏内の大学の複数の授業にて実施した。

質問項目 レジリエンスについては、平野(2010)がレジリエンスを構成する要因を、Cloningerの気質一性格理論をもとに資質的と獲得的に分類したのち作成した「二次元レジリエンス要因尺度」(「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法)の21項目を使用した。また、自己困難認知については、佐藤・相澤・郷間(2012)の発達障害のある学生が示すと考えられる困難さの項目を用いて、学生の困難さの自己認知に関する構造を明らかにするために作成した、「自己困難認知尺度」(「よくある」から「ない」までの4件法)の31項目を使用した。

手続き 調査対象者に、収集したデータの使用用途を説明し、承諾を得た上で、Google Formで作成した質問紙に回答を求めた。

## 【結果】

二次元レジリエンス要因尺度の21項目について、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い、さらに因子負荷量が低い項目を除いて、再度、同様に因子分析を行ったところ、第1因子「社会性」(3項目)、第2因子「行動力」(4項目)、第3因子「楽観性」(3項目)、第4因子「問題解決志向」(3項目)の4因子が抽出された。

さらに、自己困難認知尺度の31項目について、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い、さらに因子負荷量が低い項目を除いて、再度、同様に因子分析を行ったところ、第1因子「不安・抑うつ」(5項目)、第2因子「修学上の困難」(7項目)、第3因子「計画困難」(4項目)、第4因子「対人関係困難」(3項目)、第5因子「感覚困難」(3項目)、第6因子「不注意」(3項目)、第7因子「衝動性」(3項目)の7因子が抽出された。

つぎに、レジリエンスが大学生活における困難さの自己認知に及ぼす影響を検討するため、「二次元レジリエンス要因尺度」の下位尺度得点を説明変数、「自己困難認知尺度」の下位尺度得点のそれぞれを目的変数とする強制投入法による重回帰分析をおこなった。その結果、Figure1に示すように、「社会性」は「修学上の困難」と「対人関係困難」を有意に弱め、「楽観性」は「不注意」を有意に高めることが示された。また、「社会性」は「計画困難」と「感覚困難」を、「行動力」は「対人関係困難」をそれぞれ有意に弱める傾向が示され、「楽観性」は「対人関係困難」を有意に高める傾向が示された。このことはレジリエンスを構成する要因の一部が大学生の学生生活における困難に影響を及ぼすことを示している。

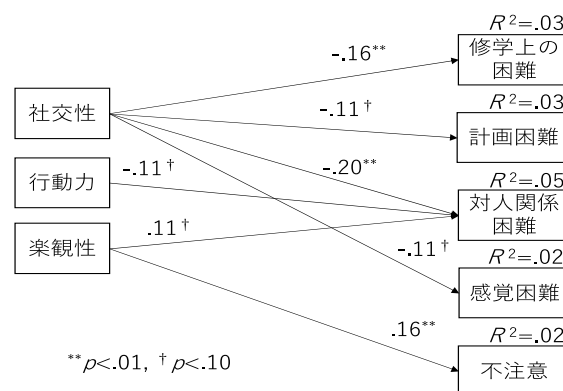


Figure1 重回帰分析の結果

## 【考察】

本研究の結果、「楽観性」を除くレジリエンス要因である「社会性」と「行動力」が自己困難認知に負の影響を与え、これを和らげる傾向があることが示された。レジリエンスは精神的な健康に寄与する(石毛・無藤, 2006)ことから、健康的に回復・適応した心理状態が学生生活における問題を大きな困難と捉えにくくさせると示唆される。

## 【引用文献】

American Psychological Association. (2020). Building your resilience. Washington, DC: American Psychological Association. Retrieved from <https://www.apa.org/topics/resilience> (November 25, 2020)

平野 真理 (2010). レジリエンスの資質的・獲得的・環境的の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成—パーソナリティ研究, 19, 94-106.

石毛 緑・無藤 隆 (2006). 中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連—パーソナリティ研究, 14, 266-280

佐藤 克敏・相澤 雅文・郷間 英世 (2012). 大学生における自己困難認知尺度の開発の試み—発達障害との関連から—LD研究, 21(1), 125-133.

(なかやまはもと・みやざとしょうた・やまむらゆたか)